

# AJPS AJPS NEWS

ASSOCIATION JAPON DE LA PRESSE SPORTIVE



- WINTER OLIMPIC GAMES in NAGANO
- PARALYMPICS '98 -長野に集う パラリンピックの10日間-
- '98 フランスワールドカップ -プレスパスのゆくえ-



ワールドカップ・アジア最終予選。昨年9月の東京国立競技場での対韓国戦、彼はスクーツ姿でマイクを持ち、サポーターの声援に応えていた。苦戦が続いた1ヶ月。ソウルでの対韓国戦に勝利したものの、カズとロペスが次の試合に出場停止と言う大きな犠牲を払うことになった。2ヶ月前のテレビのレポーターは、フィールドに戻って来た。親友カズのユニフォームを下に着て、ゴールを決めて見せた熱い男、ゴン中山。ゴンゴルが世界の壁を突き破る瞬間をこの目で見たい。

#### 撮影者 プロフィール

梁川 剛  
GO YANAGAWA



1963年10月19日東京生まれ。

日本大学芸術学部写真学科卒業。

日刊スポーツ新聞社写真部を経て、フリーランスとなる。

サッカー、ボクシングを中心に活動。

サッカー・イタリアワールドカップ、アメリカワールドカップ等を取材。フランスワールドカップへも全行程取材予定。

#### 目次 CONTENTS

3 WINTER OLIMPIC  
GAMES in NAGANO

5 PARALYMPIC '98  
長野に集うパラリンピックの10日間

8 '98 フランスワールドカップ  
-プレスバスのゆくえ-

13 Information

## ワールドカップの夏 <夢がかなう6月>

戸塚 啓 Kei Totsuka

僕と6月の特別な関係は、まだ中学2年生だった1982年までさかのぼる。3つ年上の兄が気まぐれで買っていたサッカー専門誌のおかげで、6月のスペインでワールドカップがあることを知った。

誰か有名な選手が出るからとか、どこかの国が好きだからといった感覚はあるでなかった。たんなる夜更かしに過ぎなかったから、ほとんどの場合は後半の途中でテレビの前から離れてしまった。気をきかした兄が録画してくれたビデオテープの何本かは、何の抵抗もなく重ね録り用にしてしまった。

猛烈な後悔に襲われはじめたのは、大会終了後のハイライト番組と、専門誌が発売した増刊号を観てからである。

見どころを凝縮したTVプログラムからは、スーパースターのテクニックにみとれ、エレガントな装い（当時はこんな言葉さえ知らなかったが）をただただカッコいいと思った。気違いじみたサポーターの興奮ぶりに度肝を抜かれた。

いまでも保存してある3つの増刊号からは、写真と文字の魔力に魅せられた。折り目ひとつつけないようにページをめくっていく作業は、大げさでなく官能的な瞬間だった。どんな写真が載っていたか、どんなキャプションがつけられていたか、いまでもかなりの数を思い出すことができる。

サッカーに携わる多くの方がそうであるように、それから僕も、4年周期でものを考えるようになった。正確に言えば4年ごとに訪れる6月を区切りに、記憶をストックしていくようになった。

いつかきっと、1度は行ってみたいと思っていたワールドカップを、この6月、僕は初めて体験することになった。ひょっとしたら大会は面白くないかもしれない。日本の3連敗の目撃者になってしまうかもしれない。初めての取材でパニクってしまうかもしれない。

それでもいい、と思っている。

82年のスペインも、86年のメキシコも、90年のイタリアも、94年のアメリカも、ブラウン管越しに見る世界は、どこまでも陽光が降り注いでいた。6月のフランスは暑すぎず寒すぎずの、ちょうどいい気候だと聞く。ちょっと湿っぽい天気の日があっても、日本の梅雨よりはどんなに快適だろう。

だから、すごく楽しみにしている。  
そこに、ワールドカップがあるから。  
そこに、眩しい陽ざしがあるから。

# WINTER OLIMPIC GAMES in NAGANO

長野オリンピックが閉幕して早4ヶ月。さまざまな天候のもとで繰り広げられた競技に一喜一憂した日々を思い返していただきました。冬季競技の持つ魅力、天候に左右されたスケジュール、観客動員、メディアの対応、交通アクセス、そして日本選手の活躍。自国で開催された4年に一度のオリンピックは、プレスの目にどう写ったのか？各々の立場から長野での2週間を綴っていただきました。

## 冬季オリンピックの魅力

折山敏美 Toshimi Oriyama

男子500m、清水宏保の金メダル獲得で火が付いた長野五輪は、モーグルの里谷多英の意外な優勝を経て、期待されたジャンプのラージヒル、そして団体と、ドラマチックなまでの展開でヒートアップ。さらには終盤になり、ショートトラック男子500mでも金、銅メダル獲得と、日本にとっては申し分ない大会だったといえる。

大会前に、取材する側として最も心配していたのが、各会場の交通アクセスだった。特に白馬～長野間など、どこまで渋滞を避けられるかという問題があった。

しかし始まってみると、意外なほどスムーズな運行。一部に不満な箇所はあったが、あのアトランタの無茶苦茶ぶりを考えると、会場から会場への移動も、ほぼ予定通りにこなせたのだ。これも市民の忍耐の上に成り立っていることではあるが…。

これほどスムーズに移動できたが、毎回バスの窓から一般客の姿を見ると、どうも申し訳なくなってしまったのだ。白馬やスパイアルなどで、さっさと乗れる私たちのバスを、恨めしげに見ている人々の姿があった。中にはトイレもないからと、おしゃめをして観戦しに行ったという話まで聞いた。

NAOCの予想以上な盛り上がりを見せてしまったといえばその通りだ



photo : S.Akagi

が、事前大会などで最も手薄だったのが観客誘導だったといえる。バスの乗車口を道路沿いにしたため、一気に会場から出てきた観客が溢れ、渋滞の原因になっていた場所もある。それにバスを待つ人たちにとって、最も苦痛だったのが暖を取る場所がなかったことだ。

前回のリレハンメル大会では、会場の脇には大きなテントで作ったレストランが必ず設けられていた。またキャバシティーの制限のあるスピードスケート会場では、そのレストランに大型のモニターが設けられ、会場に入り

きれなかった人たちが、そこで競技を楽しめるようになっていたのだ。さらに競技の終了したあとも、そのレストランでビールを飲み、五輪談義に花が咲いていた。

しかし長野ではそんな施設は皆無といえる。そのため観客は一気にバスを目指して移動し、大混雑が起きてしまったのだ。観客の気分はおおいに盛り上がっていたが、それは競技の行われた時の会場のみ。その余韻をゆっくり味わっている場所がなかった。

さらに全体の五輪の雰囲気を無くしていた原因に、各競技会場が離れてすぎ

ていた点がある。もし運動公園形式の会場にし、数競技の施設が同じ場所にあれば、そのスペースに行けば、入場券は無くても雰囲気は味わえたはず。どの競技場も2分も歩けば五輪の雰囲気もない、ただの街になってしまふというのはいただけないものがある。

これは後利用を、競技以外のものでと考えた施設計画の失敗だろう。施設を集中させ、年間を通してトレーニングや試合のメッカとしたり、他のイベントをするにしても、そこへ行けば何かをやっていると認識させるような場所を作るべきだったと思う。

競技運営としては、悪天候のためガタガタになったスケジュールで、アルペンのスピード系種目を、1日で3種目やってしまったり、ジャンプの団体

のように、競技の出来る条件でないのに強行したりと選手のコンディションや観客への配慮を欠いたものはあったが、史上最も南の場所での冬季五輪としては、おむね成功したといえるだろう。

また日本の国内的にも、札幌大会以上に冬季競技を全国区のものにした大会だった。ただ問題はこれからだろう。折角認識された各競技が、今後の日本でどのような発展をしていくか。各施設の維持費が膨大なものになる、というような懸念はあるが、それも夏場の利用を考えるなど、うまく運営して各競技のメッカとしなくていいかななくてはいけないだろう。しかしその点では、懸念のほうが大きくなる。トップ選手だけでなく、一般の人も利用出来るよ

うな施設にする必要があるのだが、クロスカントリーコースなどは、一般人では気軽にスキーを楽しめないような、厳しいコース設計である。そんな点などをどう改良していくか。夏季競技と違い、冬季競技はそれを実際に出来る場所が少ないので、施設の維持は重要な要素になる。

日本選手の活躍で多いの盛り上がった長野五輪。夏の五輪とは違う、自然の力とも戦う選手たちの魅力を十分見せてくれた大会だった。そんな冬季五輪の魅力を消し去ってしまうないようにするために、長野がまず、各競技の競技人口を広げるためのメッカにならなくてはいけない。この五輪の成功を生かすもの殺すのも、これからは長野市や長野県の努力にかかっている。

## スポーツマスコミは長野五輪の何を伝えたのか

上柿 和生 Kazuo Uegaki

サッカーW杯フランス大会が開幕まであと20日ばかりのところまできているのに、いまさら長野五輪の話でもあるまいと大抵の人は思うに違いない。

それにしても、日本列島を異常に早く北上するさくら前線がニュースになる頃には、長野五輪の話題が一部を除き淡雪のごとく消え去ったのは、マスコミの変わり身の速さとその習性は十分に承知はしていたものの、いささかの驚きと戸惑いを感じずにはいられなかった。

いったい、あの悲鳴と絶叫が活字になって飛び交い、狂気乱舞した紙面はどこに消えてしまったのだろうか、と思い巡らしていくと、いたいた、やつててやっている。まったく同じ調子でフランスを、日本代表チームを絶叫しているではないか。すでにこのスポーツマスコミの騒ぎは沸点に達するどころか、蒸発してしまった勢いが3ヶ月近くも続いている。またしても、大仰な見出しと空虚な言葉が活字となつて紙面上を踊り回っている。

長野五輪報道を活字メディア（特にスポーツ専門紙、誌）に限って思い返せば、大政翼賛会化した紙の芸能ワイ

ドショーそのものだった。五輪開催前はあれほどその不人気と問題性を煽りながら、清水選手のスピードスケート五輪初の金メダルが誕生するやいなや、



photo : S. Arai

その報道は見事な父と息子の涙の親子鷹物語に仕立て上げられ、スラップを巡る日本スピードスケート陣の混乱、苦悩、トレーニングの舞台裏などは通り一遍の解説と評論に終始し、その感動はいびつなものになってしまった。女子モーグルの里谷選手の金メダル

に至っては、女性誌も真っ青になるのではないかと思われるほど、彼女のライバーがホットな情報として紙面を飾った。

極め付きは、団体種目で宿願の金メダル獲得を果たしたジャンプチームの報道である。この偉業達成は、あたかも原田選手の「奇跡の大逆転ジャンプ」によってなされたかのような取り上げ方がほとんどであった。そして、記事の多くがまるで原田選手の夫婦恋愛物語かと見まがうような内容で構成され、ジャンプ団体種目がもつ難しさや面白さ、その魅力、醍醐味を伝えぬまま、八文字眉毛の泣き笑い顔と万歳コールで結んでいた。

このスポーツはジャンパー4人が飛んだ距離をつけ、その長さを競うジャンプのリレー種目である。当然、4人一人ひとりが飛ぶ距離に大きな意味と価値があることは言うまでもない。ならば、勝因は原田の逆転大ジャンプではなく、原田の大失敗ジャンプを必死で補った岡部、斎藤、船木選手達の戦いぶりであったことは明らかであり、その部分をフレームアップしなければチームを支えるサポート陣の熱い戦いや、そのスポーツの本質も魅力も伝わ

らないはずである。しかし、紙面の中にはそれに言及するものは極めて少なかった。

スポーツを社会現象面からしか捉え切れないスポーツマスコミのなんと多いことか。

嘗て、いまは亡き日本唯一のスポーツ評論家であった川本信正氏は、常々、スポーツジャーナリズムに欠かせない3要素は、記録性・娛樂性・評論性であると説かれていた。そして、最近のスポーツジャーナリズムはあまりにも娛樂性にとらわれすぎ、なかでも、いわゆるスポーツ紙（誌）はジャーナリズムの本流から離れて、大衆受けを狙った、エンターテイメントペーパーになっていると指摘をされていた。

この一因には、スポーツマスコミの

パックジャーナリズム化と芸能化があることは言うまでもないが、それにしてもスポーツライターと言われ称する人々の、長野五輪報道でのはしゃぎぶりと興奮のしかたには、唖然とするほかない。まさに民放テレビ・ワイドショーのレポーターも頗負けの実況中継型レポートが、紙面を被い尽くすかのように氾濫していた。

そこには、読み手の感性を搔き立てるような言葉も文章も見当たらない。ただ、タイトルとレイアウトの派手さだけが目を引く紙面に、見慣れ聞き飽きた、感動、涙、興奮、最高、奇蹟、愛、感謝、そして、「ありがとう」などなどの単語が他紙（誌）とまったく同じようなアングルのフォトグラフィと並び、書き手ひとりが興奮している可笑しさだけが残っていた。

これでは、切り取られた映像であれテレビには水を開けられるばかりで、活字がスポーツを伝えるには限界があると白旗を掲げなければならないだろう。

いま、フランスW杯開幕直前、その関連出版書籍数は80点を超すという異常な状況を呈している。しかし、そのなかに、どれほど「スポーツ」を「サッカー」を文化として香り豊かに伝えているものがあるのだろうか。手元にある長野五輪報道の数々の紙誌面をめぐりながら思うのである。スポーツはNAGANOに何を遺したのだろうか、スポーツジャーナリズムはNAGANOの何を伝えたのだろうかと。

## オフィシャルエージェントの16日間

青木 純二 Koji Aoki

長野へは、他のメンバーより一週間先に入った。最終的なフォトボジョンの確認、公式エージェントとしてのスペシャルフォトボジョンの場所決めやNAOCとの様々な話合い等を開会式までに終えておかなければならなかった。

カメラマンは計17名。私を含めたアプローチ所属のカメラに、常々当社がお世話になっているカメラマンで各種目の専門家やスポーツに全く関係の無いカメラマンにも参加していただいた。各々の個性がなるべく重ならない様気を配つたつもりである。

編集を加えると30名を越す大所帯で、最初から採算が合うとは思ってはいなかったが、今度日本にオリンピックがくるのはいつぞや知れず、たまには採算度外視、心おきなくやりたかったし、何よりも一点でも多く良い写真を集めたい。

5、6名のフォトチームのディレクションをやった事はあるが編集を含め30余名のディレクションは初めて。ましてやカメラマンとなると、私も人の事は言えないか皆さんは個性豊かな方達が多く、日々に疲労が重なってくると…、なんて取り越し苦労しないのがノーオン

な私の取り柄。そんな私でも、前もって肝に命じた事がいくつかある。まず絶対に腹をたてない。疲れがたまつてくると誰でも、些細な事でカッとなったりするものだが、リーダーである私が腹をたてなければ、何とかなるだろう。各種目全てで良い写真を集めるという大前提があるので、例え極力皆がなるべく不満の無い様にと手配したとしても苦情が出るのは覚悟の上。不平、苦情は参考意見くらいに聞く事。後は一步引いて皆と接していれば大丈夫くらいに思っていた。又、皆にも私はNAOCサイドの存在なので他カメラマンにも極力知っている情報を提供するなどしてフォトボジョンを良い雰囲気にする様努力して欲しいとお願いした。

オリンピックはチームで撮影するには結構好都合に出来ている。いわゆる始めショロショロ、中パッパだ。出だしは大事な競技も少な目で、徐々に多くなり、撮る方もいきおいづき、撮りまくって、このままいくといつか倒れるぞ、と思い出す頃に又種目が減って閉会式までこぎつけるのだ。

実際、撮影は予想以上にうまくいった。中日までは皆の表情も明るく、疲

席に体のでかいカメラマンがドカンと座った。用意万端、前もって用意していった10cm厚のダンボールで造った座ぶとんをお尻の下に入れたとたんに、後ろから止めてくれとクレーム。時すでに会場は身動き出来ない程の超満員。“あ～あ”だった。閉会式はカメラを持たずに、ゆっくりと楽しませてもらつた。そのままほとんど徹夜のあと、東京にもどり“公式写真集”の編集に入った。その時すでにボーグ自失状態。2日間で仕上げなければという意欲だけだった。その後すぐに公式写真展の

セレクトと製作に入った。写真集と写真展は、プロにも評価を受けたいが、オリンピックというテーマ上、一般の人にも喜んでもらえるものにしたかった。種目が多い事もあり盛り沢山は覚悟の上。写真展のセレクトは300点にもなった。写真集は“公式”でありながら一度は“公式”的な扱いをはずれた、欧米の公式写真集の様に、自由な構成にさせてもらった。日本選手団の顔写真もメダリストしか無いあります。

現時点での公式写真展は東京で1カ所、長野県は3カ所で催し、総計14万人の

人達が見に来てくれた。特に長野ではスーパーのバーゲンセールの様な混雑ぶり。正直嬉しかった。又、チーム・カメラマン達にも喜んでもらえたと思う。

オリンピックオフィシャルチームとしての総決算は、吹雪や雨の中、朝晩16日間の撮影で、誰も寝込みず、誰も事故を起こさず、誰もトラブルを起こさず、誰もケンカせずに終わった事につき思える。チームの皆さん、減った体重は元にもどりましたか？ 多々の我慢、ありがとう御座いました。■

## ドリーム・トーナメント振り返って

内ヶ崎誠之助 Seinosuke Uchigasaki

長野オリンピック、アイスホッケー競技の特徴は、女子アイスホッケーが正式種目に認められたことと、NHL（ナショナル・ホッケー・リーグ）選手の組織的な参加であった。

NHLとは、カナダ、アメリカ両国にまたがったメジャー・プロホッケー・リーグであるが、ロシア、チェコ、スウェーデンなど、北米以外のヨーロッパのアイスホッケー大国の一線選手たちもNHLでプレーしているので、規模もレベルも世界最高のリーグなのである。

その中でも、「超」がつくNHLのスーパースターは、ウェイン・グレツキーである。残念ながら、絶頂期を越えた37歳になっての日本初来日が長野オリンピックであった。今思えば、そのグレツキーを見るためにカナダを初めて訪れたのが12年前。家族とともに移り住んだのが5年以上前となる。

日本チームが闘っている予選リーグのあいまに抜け出してプレスセンターの記者会見場へ行った私は、グレツキーをはじめ、NHLのスーパースター軍團を見て、本当に彼らが日本の土を踏んだのだ、と感慨深かったことを覚えている。なぜなら、彼らを見たくてカナダへ行ったのに、その彼らが



大挙して日本にいることが、とても不思議に感じられたからである。

「ドリーム・チーム」、「ドリーム・トーナメント」と、称された長野オリンピックの男子アイスホッケー競技であったが、NHL選手以外の活躍やヨーロッパ・スタイルの優勢さが目立ったオリンピックでもあったのである。

そのようなことを理解していない日本のジャーナリストたちのアイスホッケー報道は、スター選手の追っかけ的記事に終始した。その意味では、NHLの目的は、日本においては達成されたのかもしれない。■

# PARALYMPICS '98

「長野に集う」—パラリンピックの10日間—

文：宮崎 恵理 Eri Miyazaki



大盛況のうちに終了したオリンピックの後、3月に開催されたパラリンピック。開催直前にほとんどの競技のチケットが完売したというニュースを聞き「ホンマかいな」との感がぬぐえないまま現地入りしたのだが、あにはからんや、大盛況だったのである。

アルペンスキーは大会3日目の男子滑降が吹雪のため延期となつたほかは天候にも恵まれ、スタンドは派手な横断幕で埋め尽くされるほど。また、オリンピックジャンプの団体戦などで目

立っていた変装サポーターもどきも出現し、何しろにぎやかだった。

行われた競技は、アルペンスキー、クロスカントリースキー、バイアスロン、アイススレッジスピードレース、アイススレッジホッケーの5競技。パラリンピックには運動機能の障害のあるクラス（LW1～12）と視覚障害のクラス（B1～3）がある。クラスはLW1～9が立位、10～12が座位（アルペンスキーではチュアスキーを、クロスカントリースキーではシットスキーを使用）

に大別され、視覚障害者はガイドが伴走する。1クラスの人数が少ない場合は複数のクラスがコンバインドされ、障害に応じて実際のタイムに各クラスごとのパーセンテージを換算して順位が決定するシステムだ。アイススレッジスピードレースとホッケーは下肢障害者のクラスのみで行われた。

参加人数がもっとも多く高い技術力が伯仲したアルペンスキー。大会2日目、大日方邦子（LW12/2）が滑降でさっそく金メダルを獲得し日本じゅう



を沸かせた。下肢障害のLW2は1クラスだけで40名近い選手が参加する激戦クラス。このクラスで滑降、スーパー大回転で金、大回転で銅を獲得したのがアメリカのグレッグ・マニノ選手。男子大回転の同クラスでは、金、銀、銅をアメリカが独占。障害者スポーツの先進国らしい結果を残した。このほか、滑降、スーパー大回転、大回転、回転すべての種目で金という4冠を、LW6/8クラスのロルフ・ハイツマン(スイス)、B2クラス女子のマグダ・アモ(ガイド／アナ・カサス／スペイン)が成し遂げた。日本人では志鷹昌浩と青木辰子が回転でそれぞれ金、銀を獲得した。

オリンピックと同じ白馬スノーハーブが会場となったクロスカントリースキー。女子シットスキーでは、ノルウェーのラゲンヒル・ミュケレブストがなんとバイアスロンを含む5冠を、男子視覚障害者のクラスではロシアのワレリー・クブチンスキイがリレーを含む4冠を達成した。また、車イスマラソンで世界記録を保持するスイスのハイツ、フライ選手は10kmで銅メダルを手にした。今大会正式クラスとして採用された知的障害者クラス(ID)では、日本の16歳の安彦諭が5kmクラシカルで銀メダルを、15歳の篠原広樹が20kmで銅を獲得した。

アルペンスキーの大日方選手とともに、大会2日目の話題を独占したのが、バイアスロンで堂々の金メダルに輝いたB2クラスの小林深雪選手(ガイド／中村由紀)である。視覚障害者のクラスが使用する射撃は電子音響装置の特殊ライフルで、照準を音で知らせるというもの。射撃は1発外すことごとに1分のペナルティタイムが加算される。小林は、射撃を9発命中させ2位に3分以上の大差をつけてゴールインした。また、男子シットスキー(LW10)の野沢英二も銀メダルを獲得した。

日本人のメダルラッシュの様相を呈したのが、アイススレッジスピードレースだ。7日の男女100m、500mで早くも金3つ、銀3つ、銅6つを獲得。続く1500m、1000mでもそれぞれ金3、

銀4、銅2、金3、銀2、銅3を獲得。このうち松江美季選手(LW10)と土田和歌子選手(LW11)が1500mで、武田豊選手(LW10)が1000mで世界新記録を樹立し、それぞれ3冠、2冠、3冠の栄誉に輝いた。8日、アイススレッジホッケー会場のアクアウイングでは、ショートトラックの公開競技も行われ、エキサイティングなバトルが展開された。

短いスティックを2本操り、スレッジ(スケートの刃のついたソリ)をこぎながらパックを扱うアイススレッジホッケー。スレッジの下からパックをパスするなど、トリッキーで高度なテクニックが展開されるゲームだ。今大会の覇者はノルウェー。チームを結成してわずか3年という日本は4強には残れなかったものの、対アメリカ戦で2-0という成績で初勝利を上げた。5-7位決定戦では英国と引き分け、最終的に5位となった。

金12、銀16、銅13というメダルラッシュによって、日本選手団の活躍が全国に大きく報じられ、長野パラリンピックは大会前の予想をはるかに上回る盛り上がりを見せた。このことは、参加していた選手だけでなく、それを観る者、さらには取材する立場の人間をも熱くさせてくれたことは事実だ。

とはいっても、オリンピックに比べれば参加国も競技人口も少ない。クラス分けが細かく競技としてわかりにくいくらいも多い。また、たくさんのメディアが世界じゅうから集まつたとはいっても、開催国日本でさえ競技を中継する放送局などは一つもなかった。大会としては、まだまだ発展途上にあると言わざるを得ない。

当然のことだが、パラリンピックは長野で終わりではない。2年後にはシドニー、4年後にはソルトレイクシティでの大会が控えている。今後、どれほどの人が障害者スポーツに参加するようになるのか。また、その中から世界に通用する選手がどれだけ育っていくのか。長野パラリンピックは、日本のスポーツシーンにおける新たなスタートでもあるのだ。



photo : Yo Kobayashi  
Shinji Akagi  
Masaomi Arakawa

# PARALYMPICS '98

(特別レポート)

# '98フランスワールドカップ

## —プレスバスのゆくえ—



「FIFA WORLD CUP」それはサッカーの世界大会を意味し、そこに出場するチームは、各地区の予選を勝ち抜いた代表チームである。同時に、この世界大会を取材するプレスも又、出場国、非出場国を問わず、FIFAの定めた数の枠内で「選ばれし者」と考えられている。

記者、そして写真家。今回は、本大会初出場を果たした日本代表と共にフランスの地に向かう「選ばれし者」が、プレスカードをするまでの過程を追ってみた。

### 「フォトグラファー編」

梁川剛 Go Yanagawa

\* 1月6日。日本サッカー協会会議室に集まつたのは、日本サッカー協会小野沢法報部長以下下記の通りであった。東京写真記者協会（以下写協）：三石氏、仲氏（共同通信）

雑誌協会：大橋氏、大海氏、西堀氏  
サッカーマガジン：糸賀氏  
サッカーダイジェスト：佐藤氏  
ストライカー：木鈴氏  
フリーランス：富越氏、山添氏、筆者

まず小野沢氏より、日本に与えられた30枚の取材バスについて、日本サッカー協会としての振り分け案が提示された。

「写協13、専門誌7、その他10」

各カテゴリーの出席者から出された意見をまとめてみたい。

新聞としては、連日の紙面展開を考えると、苦しいが1社1枚はいたしかたない。出来れば、日本代表専用のバスを出してほしい。

専門誌は、90年イタリア大会から前回アメリカの時点では3から2に減っているのを理解してほしい。

雑誌協会は、正直言て1枚では十数誌の要望に答えるのは無理。複数名を希望したい。

フリーランスとしては、70年メキシコ大会からワールドカップ報道を続けてきたのはフリーランス。30枚以上バスをもらわる国は、フランス、ドイツ、イタリアと日本だけ。前回のアメリカ大会に比べて新聞が4つ増え、雑誌協

会と専門誌（W サッカーグラフィック）が一つ増え、フリーランスが4つ減らされたという形。フリーランスの実績を考えて、せめて前回の13枚はキープしていただきたい。

この日の会合の全体的な印象としては、オリンピックに比べて、各カテゴリーにうまく配分されているのではないかだろうかと感じた。最後に小野沢氏よりフリーランス4名が推薦され一同合意。同時に協会側のランク付けの方法も発表された。

1、ワールドカップ取材実績（スタンダード取材も含むがこれはポイント低い）

2、ワールドカップ以外の5大陸連盟の大会取材実績。

3、Jリーグ取材実績。

4、国内代表、外国代表取材実績。

5、海外リーグ戦実績。ただし、海外の取材実績と国内のJリーグ取材のポイントは同等と考える。もちろんこれらに媒体への発表回数も加味される。

これにより、出来上がったランク表をこの日発表し、今後の取材申請などに使ってはとの意見も出たが、小野沢氏より、今回エントリーしていない人にも実績のある方がいるので、それは今は考えていないとの回答があった。

そして、今回推薦する4人は、ボイントランキング上位9名ではない人もいると発表された。その後、残り5枚を56名の中から選出することになった。決め方にについては「5名抽選」「5名推薦」「推薦と抽選の両方を取り入れる」といった意見が出された。しかし「56名の中には、もしその人が抽選で

\* 1月13日、オリンピア。出席者33名（うち雑誌協会4名）代理出席者14名。小野沢氏。

「新聞13、専門誌7、雑誌協会1、フリーランス9」と配分されたその9枚を56名のフリーランス（エージェントを含む）で分配する形となった。小野沢氏よりフリーランス4名が推薦され一同合意。同時に協会側のランク付けの方法も発表された。

1、ワールドカップ取材実績（スタンダード取材も含むがこれはポイント低い）

2、ワールドカップ以外の5大陸連盟の大会取材実績。

3、Jリーグ取材実績。

4、国内代表、外国代表取材実績。

5、海外リーグ戦実績。ただし、海外の取材実績と国内のJリーグ取材のポイントは同等と考える。もちろんこれらに媒体への発表回数も加味される。

これにより、出来上がったランク表をこの日発表し、今後の取材申請などに使ってはとの意見も出たが、小野沢氏より、今回エントリーしていない人にも実績のある方がいるので、それは今は考えていないとの回答があった。

そして、今回推薦する4人は、ボイントランキング上位9名ではない人もいると発表された。その後、残り5枚を56名の中から選出することになった。決め方にについては「5名抽選」「5名推薦」「推薦と抽選の両方を取り入れる」といった意見が出された。しかし「56名の中には、もしその人が抽選で

当たったとしてもサッカー協会が認められる訳にはいかないカメラマンも含まれている」という理由で、協会側は抽選には消極的であった。多数決の結果、僅差で相互推薦となった。又複数名エントリーしているエージェンシーに関しては「1棒」として考えるという点で一致。5名連記の無記名相互推薦の結果右記の5名が決まる。この時点で、5番目を決選投票で落選した松本氏が次点と言ふ形で、ウェイティングの1番となることを確認する。しかし、ウェイティングリストについては、小野沢氏より、「前回のアメリカ大会ではフリーランスのみでウェイティングリストをつくりましたが、今回は写協等も含めてリストを作りたいので、その点はサッカー協会に一任してほしい」と発言があり、一同は合意した。

- 1 清水和良
- 2 六川則夫
- 3 今井恭司
- 4 梁川剛（以上協会推薦）

- 5 山添敏夫
- 6 赤木真二
- 7 富越正秀
- 8 倉井美行
- 9 山田一仁（以上相互推薦）

その後、FIFAより取材バスが5枚追加され、以下の5人に決定する。

- 1 松本正
- 2 菅原正治
- 3 Jリーグフォト（以上相互推薦）
- 4 フォートキシモト
- 5 雜誌協会（以上協会推薦）

今回のこれらの話し合いに全て参加してきた私的な意見だが、サッカーワールドカップという世界一大きなスポーツイベントを取材するということは、とてもなく大変な事であり、名誉でもある。ベテランと新米。実績を考えると勝負あったの感もあるが、その実績も、積み重ねることをやめた時点で、それ以上増えしていくことはない。そして忘れてはならないことは、我々の仕事は、いかに大勢の人々にサッカーの写真を見てもらえるかという事である。バスを手にした人も、そうでない人もサッカーそのものが、もっとボビュラーなものになっていくために日々努力していかなくてはならないと思う。その頂点がワールドカップであるが、最高のサッカー写真は、意外と身近なところで生まれるかも知れない。

### 「取材記者編」

原田公樹 Koki Harada

ジョホール・バルの興奮が冷めやらぬ97年12月1日のこと。日本サッカー協会から一通のFAXが送られてきた。「FIFAワールドカップ1998・取材申請について」。サッカーを取材する記者にとってそれは待ちわびた知らせであり、また四年に一度訪れる最大の試練の通知でもあった。

だが日本国内での注目は高く、とくに雑誌・フリーランスの記者のなかでフランス・ワールドカップの取材に行きたい、と思う記者は多かった。かつてなく熾烈なバス獲得合戦になる、想像できた。こういった状況のなか、出来るだけ多くの媒体と記者が得する結果を導くため、日本サッカー協会は取材実績で差別化を図ろうとしたのである。

締切り2日前の12月13日、出来上がった16枚におよぶ取材歴のリストを日本サッカー協会へFAXした。ミスがないように一枚一枚丁寧に送信して、電話で広報部へ無事に届いたことを確認。賽は投げられた。

この時点ではフランス大会の取材バスの割当は50枚。通信社、一般紙、スポーツ紙、専門誌、雑誌、フリーランスすべての紙媒体の記者（ジャーナリスト）がこれを分け合うことになる。94年アメリカ大会は追加分も含めて46

枚だったから、日本が出場したからといって大幅には増えなかった。逆にフランスはアメリカと比べてスタジアムの規模が小さく、プレスシートやプレスセンターは狭い。出場国が32カ国に増えた分、一カ国あたりの割当ては減る傾向にあった。

そのころ英國に滞在していた私は転送されたFAXを受け取り、その内容に愕然とした。「事前登録」として95年から98年まで過去4年間に取材した国際Aマッチ（代表チーム同士の試合）をはじめ、すべてのサッカー取材歴を日々、スコア、場所も併せて記せ、と書かれてあったからだ。

「そんな無茶な……」。手元にスケジュール帳はおろか、試合記録の類は一切ない。締切りまでの2週間で4年間の記憶を逆上れ、というのか?涙が出てきた。

この時点ではフランス大会の取材バスの割当は50枚。通信社、一般紙、スポーツ紙、専門誌、雑誌、フリーランスの記者が集まっていた。お互いに顔を見つめ合わせて笑みを浮かべる。みんな緊張していた。広報部の小野沢洋平部長代理（現部長）から雑誌・フリーランスの登録者数は、辞退者を除いて現時点で56名。そのうち各社の雑誌編

純二専務理事から通信社・新聞社から79名、サッカー専門誌から17名、雑誌・フリーランスから61名、計157名の記者からの登録を受けつけた。1月10日ごろまでに大枠を決めたい、バスが取得できなかった記者には取材用の有料席を確保したい、といった基本方針についての説明があった。

1月初旬、日本サッカー協会から雑誌・フリーランスの記者の取材人数枠を1月14日14時からの会合で決定する、とFAXが入った。出席しないと原則として対象者から外れる、とのことだった。

13日におこなわれたフリーランスフォトグラファーの会合では、日本サッカー協会の推薦枠と投票によって決まった、と知られた。

14日午後2時、日本サッカー協会の会議室にはほとんどの雑誌・フリーランスの記者が集まっていた。お互いに顔を見つめ合わせて笑みを浮かべる。みんな緊張していた。広報部の小野沢洋平部長代理（現部長）から雑誌・フリーランスの登録者数は、辞退者を除いて現時点で56名。そのうち各社の雑誌編

集者ら、この会議に欠席した12名が除外され44名。さらにその場で、「実際にレポートする方々に行っていただきたい」と言う小野沢氏の説明を受け入れた4名の雑誌編集者が辞退し、最終的に40名のなかから雑誌・フリーランス枠の13名が決定されることになった。

13名の決定方法は、8名を協会推薦として、また5名を抽選によって決める。抽選は取材実績によって5回、2回、1回に分かれて、当たる確率に差異があること。これらは日本サッカー協会の総合的な判断によるもの、と説明があった。

40名全員がその説明を受け入れたあと、8名の協会推薦者名と抽選回数が一覧になった紙が配られた。

「あった！」自分の名前のある方に〇印を見つけた。推薦であった。過去6年間、ほぼすべての日本代表の試合を取り材したかいがあった。

その後全員の見ている前で抽選がおこなわれ、5回のチャンスの人から3名、2回のチャンスの人から2名が選ばれ、計13名が決定した。さらに抽選

に漏れた人のなかから取材バスが追加発行されたときのためにウェイティングリストが作成された。

ダイナスティカップの直前、2月18日にFIFAから10名分の追加取材バスの発行が決まった。日本サッカー協会は通信社・新聞社に4名。雑誌・フリーランスのうち抽選で5回のチャンスながらも4名が協会推薦者として。ウェイティングリストから上位2名が選ばれた。こうして記者の「ROAD TO FRANCE」は決まった。

最終的に通信社・新聞社が32名、サッカー専門誌9名、雑誌・フリーランス19名の計60名の記者が手にしてフランスへ行く。

私自身が当事者だから、まったくの公平な判断はできないが、今回の取材バスの分配はフェアにおこなわれ、バスの取得の有無に係わらず大多数の人が納得できる結果になったと思っている。まず喜ばしいことは雑誌・フリーランス枠の19名うち全員がフリーの記者だったという点だ。夏季、冬季ともオリンピックの取材は、だいたい出版

社の社員編集者で入数枠は埋まってしまい、フリーの記者が取得するのはかなり難しい。これと比較すると、あらためてサッカー界ではフリーランスの立場が理解されていること、と同時に期待度の高さも感じた。

また人選も、経験豊かな大先輩の記者の方々をはじめ、私のような2回目のワールドカップ取材になる者。また初めての方などバランスの取れたものになったと思う。抽選によって選出された7名（追加2名含む）も、日々のサッカー取材でご活躍されている方々ばかりである。

4年後の2002年大会は母国開催であるため、取材枠もまた取材を希望する記者も大幅に増加するだろう。今回のような選出方法でいいのか、またよりペーナな方法があるのではないか、といった議論を絶やしてはならない。最後に一筆。取材バスを取ることがすべてではない。よりよい取材をして伝えることが記者としての使命であることを忘れてはならない。自戒の念を込めて。

## Information

### コダック

#### 社名および住所変更のお知らせ

1998年5月1日付で、株式会社コダック情報システムズおよびイーストマン・コダックジャパン株式会社の営業権が日本コダック株式会社に譲渡されました。また、社名も日本コダック株式会社からコダック株式会社に変更しました。これにともない、東京営業所の住所が下記の通りに変わりました。なお、株式会社コダック情報システムズは、ドキュメントファイリングシステムのメンテナンス事業を専門に行う会社として存続します。

東京営業所： 東京都中央区日本橋 小網町6-1山万ビル



高解像度200万画素のプロ用デジタルカメラ「コダックプロフェッショナル DCS520 デジタルカメラ」を発売



寸法： 161 (W) × 174 (H) × 92 (D)  
mm

重量： 1650g (レンズ、PCカード、バッテリーを除く)

主な仕様

- ・200万画素 (1728 × 1152)
- ・階調再現性 A/D 変換:RGB各色12ビット

・感度 ISO200～1600相当

- ・3.5コマ/秒、最大12コマまで連写可能
- ・撮影枚数 連続300枚以上、バッテリー交換可能

- ・内蔵マイクの使用で電話レベルの音質での録音が可能

- ・新設計のファインダーにより、ファインダーで見える領域そのままの画像が得られる。オートホワイトバランス機能、E-TTLオートフラッシュ露光機能、アンチエイリアス(色のにじみをなくす)機能付

価格： メーカー希望小売価格  
(本体、税別) 1,980,000円

## 新賛助会員のご紹介

### 株式会社プロラボクリエイト東京

窓口： 営業本部第一営業部  
住所： 〒141-0031 東京都品川区西五反田3-6-32  
TEL： 03-5496-9811  
FAX： 03-5496-9812  
担当： 伊藤 新一

私どもプロラボクリエイト東京は、お陰様で創業18周年を迎えた。昨年9月には最新のデジタル設備を備えた新橋営業所がオープンし、都内に8営業所となりました。また、会員の皆様に取材の先々でご利用いただけますよう、クリエイトグループネットでは、北は北海道から南は九州まで、全国に合計20営業所を設け、リバーサル現象・デュープ・プリントはもちろんのこと、アナログからデジタル対応まで映像に関するることはすべてうけたまわっております。なかでもリバーサル現象は全国均一仕上がりを自負いたしております。その他写真展への対応としましては、各メーカーギャラリーの光源を再現できる色評価用の蛍光灯とタンクスステン照明を備えたプリント検品ルートを、五反田営業所に設けています。

皆様への良きパートナーとして、一層お役に立てる総合プロラボを目指しております。今後ともお引き立てのほど、よろしくお願い申し上げます。

### ニコン

総合画質性能を追求したデジタルカメラ「ニコンデジタルカメラ COOLPIX900」発売

株式会社ニコンから、新開発した高性能3倍ズームニッコールレンズと総画素数130万画素CCDを搭載した「ニコンデジタルカメラ COOLPIX900 (クールピクス900)」が発売された。

「COOLPIX900」は、専用に開発した焦点距離5.8mm～17.4mm (35mm判換算:38mm～115mm) の高性能3倍ズームニッコールレンズと総画素数130万画素1/2.7インチCCDを搭載し、無段階に近いピント制御を行う高速・高精度オートフォーカス、撮影状況に対応する3つの測光モード、撮影状況に応じて使い分けられる多機能内蔵スピンドライトなど、ニコン独自の数々のカメラテクノロジーを駆使し、CCDの画素数だけに頼らない、カメラとしての総合画質性能を追求し、高画質を実現したデジタルカメラ。

また、屋外でも鮮明で見やすい2インチ低消費電力シリコンTFT液晶採用のカ

### 株式会社フレームマン

住所： 〒106-0047 東京都港区南麻布1-17-1  
TEL： 03-3452-1327 (直)  
FAX： 03-3452-1328  
担当： 細野 弘一

フレームマンは、写真パネルおよび額装加工、絵画・リトグラフ・書の和洋額の製作、グラフィック表示物の大型・小型パネル製作、宣伝媒体の表示物等々の工場製作はもとより、写真ギャラリー・美術館・博物館・エキシビション会場・ショールーム・その他の壁面設営・取付作業など、展示物一切のフィニッシュワーカーとして、総合的に製作する専門企業です。

創業40年、長年にわたり培われた経験と技術力で、皆様の個性豊かなオリジナル作品をサポートいたします。依頼したら安心して任せられる信頼度の高い企業として高評を得ています。作品の大小を問わず、造形意図を十分に組んで、展示物として効果を上げることが大切だと考えていますので、ご遠慮なくご相談ください。

価格： メーカー希望小売価格 (本体、税別) 110,000円

寸法： 157 (W) × 75 (H) × 35 (D)  
mm

重量： 350g (電池別)

主な仕様

- ・総合画素 130万画素、1/2インチ、1280 × 960

- ・3倍ズームニッコールレンズ、f=5.8～17.4mm (35mm判換算38～115mm)、F2.4～3.6

- ・感度 ISO64相当

- ・撮影可能コマ数

- FINE約6コマ、NORMAL約12コマ、BASIC約24コマ (4MBカード時)

- FINE約15コマ、NORMAL約30コマ、BASIC約60コマ (10MBカード時)

- FINE約36コマ、NORMAL約72コマ、BASIC約144コマ (24MBカード時)

- ・撮影モード フルオートモード/カスタムモード (撮影メニューによりホワイトバランス、測光モード、露出補正、階調補正、モノクロモード等の設定が可能)



## キヤノン

キヤノンデジタルプレゼンルーム  
開設のお知らせ

キヤノンでは、フォトハウス銀座にてデジタルルームを設置いたしました。皆様も当社のデジタルカメラ「EOS D2000」をお試しください。お申し込み等に関しましては、下記の通りです。

営業時間：  
毎週火、木曜日 13:00～17:00（祝祭日およびフォトハウス銀座休業日を除く）

場所：  
キヤノン販売株式会社フォトハウス銀座2階（東京都中央区銀座5-9-9）  
申込先：  
キヤノン販売株式会社デジタルカメラ販売推進課 担当川嶋、中村、中塚  
TEL 03-3455-9349 FAX 03-5476-7966



## 堀内カラー

コダクローム新現像処理を開始

（株）堀内カラーではコダクロームの新現像処理システム「K-LAB」を導入し、従来より高度の現像処理を行っております。大きな特徴としましては、第一に白のぬけがより良くなり、第二に黒のしまりも一段と良くなりました。第三にコダクロームがもつ独特のこくが増し、加えてぬけも良くなりました。第四に増感処理が可能となり、+1/2、+1、+2の三段階増感処理が出来るようになりました（但し、増感現像には撮影時に色補正が必要です）。

このような品質の向上は、従来の現像方式の十数倍の高現像攪拌が可能となり実現しました。また、増感処理が可能となったのは、従来の現像方式では複雑な現像スペックの変更が必要でしたが、「K-LAB」では全コンピュータ制御による精密なコントロールによって管理されるようになつたためです。

さらに大きな特徴として、コダクロームは「変褪色」の特性があり、20年、30年たっても撮影時の状況からほとんど変化はありません。

深みがある重厚な色彩と卓越した質感を描写するコダクロームで、迫力のあるスポーツシーンをおさえてください。

## ペンタックス

レンズ交換式中判カメラで世界初のオートフォーカス機能搭載  
「ペンタックス645N」

旭光学工業株式会社が、レンズを交換できる中判カメラでは世界で初めてオートフォーカス機能を搭載し、高画質な写真を撮るのに有利な6×4.5cm判のフィルムを使用する、AF中判一眼レフカメラ「ペンタックス645N」を発売した。

本製品は、35ミリ一眼レフカメラにも匹敵する優れた機動性と、プロ写真家の要求をも満たすハイレベルな描写力を両立した高性能なAF中判一眼レフカメラ。レンズ交換式中判カメラで世界初となるオートフォーカス機能をはじめ、三種類の測光方式、高速内蔵ワインダー、オートプラケット機構、フィルム画面外への撮影データ写し込み装置などの多彩な機能を盛り込んでいます。露出モードやドライブモードなどの各種設定には、ダイヤルやレバーを操作するわかりやすい方式を採用。また、6×4.5cmの画面サイズは35mm判にくらべ面積比で約2.7倍となり、きめ細かな描写や被写体の質感・ディテールの再現に有利。新開発の五種類



のAF対応交換レンズ、従来からのレンズ・アクセサリーシステムと互換性により、その画面サイズの持つ描写力を十分に引き出すことが可能。

価格：メーカー希望小売価格（本体、税別）300,000円 ※120  
フィルムバック・大型アイカップ・ストラップ付  
寸法：150(W) × 111(H) × 117(D) mm  
重量：1280g

# Infomation

## 新入会員紹介

次の10名が5月20日の総会を経て正会員となりました。

青森直樹

三嶋裕次郎

石田三千代

水谷宗人

大西則彦

日比野武男

奥野雅和

山田高央

松永和章

若井晴彦 以上10名

なお、次の3名は総会欠席のため、次回の理事会出席を経て正会員となります。

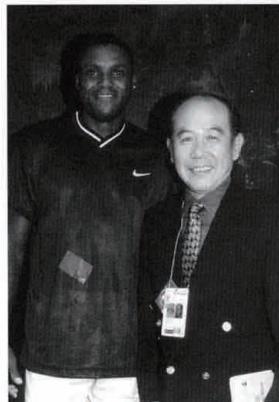
久保暁生

菅沼浩

田村修一 以上3名

## 訃報

### 佐瀬さんカッコ良すぎますよ



5月23日早朝、佐瀬稔氏が大腸癌のため他界されました。享年65歳でした。ご冥福をお祈りし、慎んで追悼文を掲載させていただきます。

### 事務局より

#### 退会

誠に残念ながら、長年当協会にご尽力頂いた川田徹氏、阿久津悦夫氏が一身上の都合で97年度末をもって退会されることになりました。今後も引き続きご活躍されることをお祈り致します。

#### 除名

日本スポーツプレス協会会則11条第2項に著しく抵触したため97年度末をもって松本建男氏を除名いたします。

当協会事務局のE-mailアドレスが決まりました。事務局宛の連絡はこちらでも結構です。

**ajpsjim@ibm.net**

#### 編集後記

赤木 真二

円安です。'95年の狂乱的円高を経験してしまうと、現在の歐米での物価は五割り増しの感があります。今にして思うとあの円高がいかに虚榮に満ちたものであったかと、つくづく思うのですが、それでも当時物を買いまくった我々日本人は、「物の本質を見失っていた」と言わざるをえません。

先日、アムステルダムで欧洲クラブチャンピオンの決勝を撮影し、サッカーの本質の「楽しさ」を再認識させられました。プレーのレベルの高さは言うに及ばず、その試合を受け入れる時の体制も見事なものでした。全てにおいて国際感覚の高さを物語っていました。残念ながら今の日本にはあれだけのサッカー文化はありません。だからこそ、ワールドカップ初出場は、国際舞台への第一歩として意味があります。「物の本質」を見失う事のないように、スポーツの世界でのフェアな熱戦を期待したいものです。

**Canon**

**CREATE**  
PRO-LAB FOR CREATIVE PROFESSIONALS

 **DESCENTE**

**FUJIFILM**



**HORIUCHI COLOR**

**Kodak**

日本スポーツプレス協会

**Konica**

**MINOLTA**

**Nikon**

**PENTAX**

**SHASHIN  
kosha**